

道元禪師が著した『正法眼蔵』という書物があります。この中に、「菩提薩埵四摂法」という項目（巻）があります。これは「菩薩が行う、生きとし生けるものための四つの行い」という意味で、「布施・愛語・利行・同事」の四つが説かれています。菩薩とは、地藏菩薩や観世音菩薩などに代表される、自分だけでなくあらゆる苦しみから人々を救おうと誓いを立てて、仏教の修行を続ける仏さまをいいます。

この、「四摂法」の第三番目が「利行」です。

利益の「利」に、「行う」と書く「利行」は、人のために何かをする行いのことをいいます。私たちは、人のために何かをする時、「私が、あの人にこれくらいのことをしたら、あの人は、私に何をしてくれるのかな」とか、「人のために何かをしてばかりいると、自分には何も残らないのではないかな」とか、いろいろなことを考えてしまいがちです。

道元禪師は、そういうことをちゃんとわかっていて、その教えの中でしっかりと私たちに諭してくれています。

まず、「私が、あの人にこれくらいのことをしたら、あの人は、私に何をしてくれるのかな」ということについて、道元禪師はこうおっしゃっています。

「みかえりをもとめず、ただひとえに利行に催されるのです」

この、「催」すという言葉が大切です。「催す」とは、あれこれ考えるよりさきに、自然に心や体が動く状況を表す言葉です。困っている人がいたら、みかえりがあるかなかなど、あれこれ考える前に、その人のために何かをしなさい、と道元禪師は私たちに諭しているのです。

そして、「人のために何かをしてばかりいると、自分には何も残らないのではないかな」ということについて、道元禪師は、次のようにおっしゃっています。

「そうではない。利行とは、そのように半端なものではない。相手にも自分にも、同じようによろこびを分け与えてくれるものなのだ」

人のために何かをしているあなたにも、「よろこびを分け与えてくれるのだから、そんな心配なんかせずに、自然に一心に、「利行」をお続けなさい、と道元禪師は私たちに伝えているのです。

人のために何かをしたいと思う時ほど、さまざまなことを考えてしまうものです。その時は、「催す」という言葉を思い出してください。そして「利行」を行う時、その「利行」という行いそのものから、相手と自分に同じようによろこびをもらえるということも、思い出してください。

— 終 —